

要 旨

本研究では、音読に焦点を当て、英語で自分の考えを表現する基礎的な力を育てるための指導の工夫について探ったものである。表現活動を支える基礎的な力を、「正しい語順と基本表現の定着」と考える。定着の方法として、語句のかたまりごとに読むチャンク読みやワークシートの音読を取り入れ、それらの効果についての検証を行った。その結果、生徒は英文を暗唱しながら正しい語順や基本表現を身に付けることができた。そして、その力の活用で、自己表現する意欲の高まりも見られるようになった。音読は、表現する基礎的な力を育てるために有効であることが分かった。

〈キーワード〉 ①音読 ②チャンク読み ③暗唱 ④自己表現

1 研究の目標

自分の考えを表現する基礎的な力を育成するために、音読活動を取り入れた学習指導の在り方を探る。

2 目標設定の理由

中学校英語科では、コミュニケーション能力の基礎を養うことが求められている。そのことについて、平成20年9月に発行された中学校新学習指導要領解説外国語編では、コミュニケーション能力の基礎を養うとは、「単に外国語の文法規則や語彙などについての知識を身に付けさせるだけではなく、実際のコミュニケーションを目的として外国語を運用することができる能力の基礎を養うことを意味している。」¹⁾と述べられている。このコミュニケーション能力を育成させるためには、英語で表現するための基礎的な力が必要であり、また、英語を通して、相手と意思疎通ができるという経験を英語学習の中に多く仕組み、「自己表現力」を育てていくことも重要であると考えられる。

しかし、平成19年度佐賀県小・中学校学習状況調査の結果を見ると、「表現の能力」の観点においては課題が見られる。本校の2年生に目を向けてみると、1年次の評価観点別通過率は4項目とも県平均通過率を上回っていたが、単語数の増加や文法の難易度が上がるにつれて、意欲や表現力という点で低下の傾向にある。日ごろの生徒の様子をよく見てみると、話す・書く活動において、英文としての誤りが目立つ。これは、基礎的な単語力や基本文の知識不足であったり、英語の正しい語順が理解できていなかったりすることに起因しているのではないかと推測される。こうした状況を改善するためには、基本的な語彙や表現、正しい語順の習得を培う指導が必要だと考える。國弘は、この基礎的な力を身に付ける最も簡単で効果的な方法が「音読」だと述べている。また、中嶋は、「英語を苦手だと感じている生徒の約90%が、一番できるようになりたいこととして『本文がスラスラ読めるようになりたい』という項目を選んでいる。」²⁾と述べている。つまり、生徒が苦手意識をもつ原因の一つが音読に関係しており、その指導の工夫によって英語の基礎的な力を身に付けることができるのではないかと考えられる。音読は、語彙チャンク（意味的にまとまりのある語彙）を通して、英語の語順や英語の表現が身に付く効果があるといわれている。よって、音読指導を工夫することで、自分の考えを表現したいときの基礎的な力も育成できるのではないかと考えた。

そこで、本研究では「音読」を学習の核に据えることによって、自己表現力の基礎が培われるのではないかと考えた。具体的には、生徒が音読シートを使い、語彙チャンクを意識して音読することによって、英語の語順で理解しながら暗唱する。その結果、語彙チャンクや正しい語順がインプットさせることができ、それが「自分の考えや気持ちを伝える」という自己表現する際の基礎的な力となるので

はないかと考える。

3 研究の仮説

中学校英語科の授業における音読活動において、チャンク読み（語句のかたまりごとの区切り読み）を中心とした指導の工夫をすれば、正しい語順や基本表現など、自分の考えを相手に伝える力の基礎を身に付けることができるであろう。

4 研究の内容と方法

- (1) 表現力と音読との関連について、文献や資料を基に理論研究を行う。
- (2) 理論研究を基に、音読を取り入れた指導計画の作成を行う。
- (3) 音読活動を取り入れた学習指導案を作成し、所属校の2年生で検証授業を行う。
- (4) 音読活動を取り入れた授業に関する生徒への調査を検証授業前後に行い、生徒の変容を分析する。
- (5) 授業について検証を行い、仮説の有効性を考察し、研究のまとめを行う。

5 研究の実際

- (1) 「自己表現力」と「音読」との関連

英語学習において、英語を身近な言葉としてとらえ、英語を使って相手と意思疎通ができるという経験をさせることにより、自分の視野を広げさせたり、自文化や異文化の理解を深めさせることができる。そして、英語学習の中にそのような経験を多く仕組み、その活動を通して、「自己表現力」を育てていく。英語科における「自己表現力」を、「情報や自分の考えなどを英語で話したり書いたりして伝える力」と考える。その力の基盤となっているものとして、語彙チャンクの定着や正しい語順の理解などが挙げられる。そこで、その基礎的な力を付けるための手立てとして「音読」に着目してみた。

音読は言語を音声化し、その意味や内容を理解する活動であり、また、伝達のための音声表現である。生徒は音読を繰り返すことで、英語の特徴に触れたり、書き手の意向や内容などを意識したりするようになる。土屋は音読について、「英語が使えるようになるためには、頻度の高いフレーズをチャンクとして数多く記憶することが必須である。正しい音読をするためには句構造文法の知識が不可欠であり、音読はそのような知識をただ頭で理解するだけでなく、感覚的に瞬時に認識する能力を養うのに役立つ。」³⁾と述べている。また、門田は、音読は音声や文字のインプット処理とアウトプット（スピーキング）処理をつなげ、語彙・構文などを丸ごと記憶できるという効果があることを述べている。これらのことから、音読指導の工夫によって、まとまりのあるフレーズを数多く記憶できたり、英語特有のリズムやイントネーション、文章の流れや正しい語順などが長期にわたり定着したりという効果が期待できる。

以上のことから、本研究では「音読」を学習の核に据えることによって、自己表現力の基礎が培われるのではないかと考えた。具体的には、生徒は音読シートを使い、語彙チャンクを意識した音読によって、英語の語順で理解しながら暗唱する。その結果、語彙チャンクや正しい語順をインプットできるのではないかと考える。

- (2) 自己表現力の基礎の育成を図る授業過程

基礎的な自己表現力の定着を目指して、次のような流れで授業を行った。

Warm-up

生徒同士のインタラクションを図る基礎を養う。

実践例：Free Talk

- ① Today's topic の提示
 - ・ 既習文法事項（例：be going to ～）を提示する。
- ② Free Talk Time
 - ・ ペアで Free Talk をする。出だしの文を与え、80秒間会話を続けながらインタラクションを図る。途中、相づち（Really?/I see./Well...など）を入れながら、沈黙にならないように会話を続ける。

What are you going to do after school?

A: What are you going to do after school ?

B: Well...I'm going to play basketball with my friend. How about you?

A: I'm going to go to the library....

Free Talkの内容(生徒の会話より)

内容理解

音読活動

音読に慣れ親しみながら暗唱し、語彙チャンクや正しい語順の定着を図る。

実践例：チャンク読み

- ① 「音読シート」を使って
 - ・ 英語のリズムに慣れるように文字の大きさに強弱を表し、チャンク読みで、語順の定着を図った。
- ② 「暗唱シート」を使って
 - ・ 音読活動の最後に暗唱タイムを与え、4段階のステップで本文を暗唱させて、語彙チャンクの習得、正しい語順の定着を図った(写真)。
- ③ 「重要表現シート」を使って
 - ・ 重要表現シートを用いて教科書本文中の大切な表現を音読、暗唱させて、更に重要表現や正しい語順を浸透させた。



ペア音読の様子

自己表現活動

音読活動で身に付けたことを生かして、自己表現活動に主体的に取り組み、自己表現力の基礎を養う。

実践例：スピーチ作成

- ① 「使わせる」表現活動
 - ・ 「重要表現シート」の一部を変えて英文を5つ作りペアで伝え合わせ、新出事項の定着を図った。
- ② 「使う」表現活動
 - ・ あるテーマを与え、4～5文のスピーチ文

When I was a child, I wanted to be a pianist.
Because I like playing the piano very much.
I am interested in music.

生徒作品例

を作成し、発表する活動を行った。出だしの言葉のみを与え既習表現を主体的に使うことによってスピーチ文を完成させることによって表現意欲を高め、基礎的な表現力を養った。

図1 音読を組み入れた指導プロセス

(3) 音読にかかわる手立て

ア 音読指導の提示

音読練習パターンとして、モデルを聞かせた後、①一斉読み、②ペア読み (English→English)、③ペア読み (Japanese→English)、④Read & Look up、⑤シャドーイング (ペア)、⑥シャドーイング (一斉) の順に音読練習を行った (表1)。また、授業以外の場面でも音読練習を行うことを促し、音読回数をワークシートに記入させ、音読の成果が更に上がることを目標とした。

表1 音読のパターンと方法

音読活動	時間	方法	指導上の留意点
① 一斉読み	4分	・ 本文のすべてを教師がチャンクごとに範読し、生徒もチャンクごとにリピートする。	・ 単語の正確な読みを身に付けさせる。 ・ 意味のまとまりを視覚的につかませる。 ・ 音読シートで音の強弱やつながりを意識させながら音読させる。
② ペア読みA	2～3分	・ ペアの一人が英語の1チャンク聞いてから、もう片方がリピートする。	・ はっきり大きな声でリピートさせる。 ・ チャンクごとに意味を理解しながらリピートさせる。
③ ペア読みB	2～3分	・ ペアの一人が言う日本語の1チャンク聞いてから、もう片方が何も見ないで英語で言う。	・ 相手が英語で言えない場合には、始めの部分をヒントとして与えさせる。
④ Read & Look up	2～3分	・ 教師の「Read」の声で生徒は1チャンク読み、そのチャンクを音読シートから目を離して暗唱する。チャンクごとにそれを繰り返す。	・ 本文を暗唱に近づけさせる。 ・ 活動の様子を見て、暗唱のできていないチャンクがあればそのチャンクを繰り返す。
⑤ シャドーイング (ペア)	5分	(Step1) ペアの一人が本文のうちの前半を一定のペースで読む。 聞こえてきた文章を、即座にそのまま片方が繰り返す。 (1回目: 音読シートを見ながら 2回目: 音読シートを見ずに) (Step2) ペアの一人が本文のうちの後半を一定のペースで読む。 聞こえてきた文章を、即座にそのまま片方が繰り返す。 (1回目: 音読シートを見ながら 2回目: 音読シートを見ずに)	・ 本文を暗唱に近づけさせる。 ・ アクセントやイントネーションなどの英語の音感を身に付けさせる。 ・ 相手の音読に集中しながらシャドーイングさせる。 ・ 2回目の活動の際、途中で止まってしまったときは、続けられるところから再度チャレンジさせる。それでも難しいようであれば、音読シートを見てもよいこととする。
⑥ シャドーイング (一斉)	3分	・ 教師が本文を一定のペースで読む。生徒は聞こえてきた文章を即座にそのまま繰り返して行く。	・ 本文を暗唱に近づけさせる。 ・ 教師の音読に集中しながらシャドーイングさせる。 ・ 途中で止まってしまったときは、続けられるところから再度チャレンジさせる。それでも難しいようであれば、音読シートを見てもよいこととする。
⑦ 暗唱タイム	7分	・ レベルを4段階設けた暗唱シートを使って暗唱していく。暗唱シートを折り曲げたり隠したりしながら活用し、暗唱させていく。	・ 個々に目標を持たせて暗唱に取り組ませるが、最低ラインの目標はあらかじめ伝えておく。(例: レベル日まで) ・ 最終目標をレベルD (すべて暗唱) とする。

イ チャンクを意識した音読

音読に関心をもたせ、英語の正しい語順に慣れさせるために、「音読シート」(教科書本文をチャンクで区切りチャンクごとに日本語訳したもの)を配布した(図2)。これを使って音読することで、チャンクごとに意味を確認しながら生徒は読み進めることができるのではないかと考えた。そして、生徒が音読を繰り返しながら英文を暗唱し、実際に自分の考えを伝えたいときに、身に付けたチャンクをうまく組み合わせることで表現できるようになることを目標とした。

ウ ペアを主体にした音読

音読に関する意識調査の結果から、ペアで行う音読で、より活発に活動できていることが分かった(表2)。表現活動は、生徒同士の活動を中心としているため、活動に対する一人一人の意欲は互いに相乗効果をもたらす。よって、ペアを主体にして音読させることによって、音読活動が更に活発に行わ

It was just / before Christmas .	それはちょうど...だった / クリスマスの前"
The organ stopped working .	「オルガンが鳴らなくなりました。」
We need it tomorrow.	明日、オルガンが必要なのに。
What shall we do ? / "Franz asked.	どうしたらいいだろう?」とフランツが尋ねた。
"I have an idea ". / Joseph answered.	「私には考えがある。」 / ...とヨセフは答えた。

文字の大きさが強弱を意識させる

図2 音読シート

表2 事前意識調査より (一部)

	よく声を出している	だいたい声を出している	あまり声を出していない	声を出していない
一人で	6	13	5	0
ペアで	13	11	0	0
全員で	7	15	2	0

授業中、教科書を音読するときの様子は?
(対象2年生:24名)

れ、語彙チャンクが身に付くのではないかと考えた。座席の隣や前後、習熟度別などでペアを組ませ、バリエーションをもたせた形で行った。

エ 音読を生かした自己表現活動

教科書の本文を十分に音読させた後、英文の一部を変えて自己表現活動に発展させ、暗唱してペアで伝え合わせる。さらに、音読によって身に付けた表現を用いてスピーチ文を作って発表させる。そして、その表現が伝えられた喜びを味わうことで、生徒が音読の効果をもつて実感できるのではないかと考えた。

(4) 検証授業

表3 音読を取り入れた単元の学習指導計画 (Unit 6, Let's Read 2)

Unit 6	指導目標	○ There is(are)～構文の形・意味・用法を理解し、表現できるようにする。 ○ 動名詞を使った文の形・意味・用法を理解し、表現できるようにする。 ○ 物語を読んで、登場人物の心情を読み取り、内容を理解できるようにする。 ○ 音読活動を楽しみ、音読を通して身に付けた表現を用いて自分の考えを伝えられるようにする。		
学習段階	学習内容	配時	学習活動	指導上の留意点
・ 本文のあらすじの理解 ・ There is(are)～構文、 動名詞の形・意味・用法の理解 ・ 各パートごとの本文の内容理解 ・ 各パートごとの本文の内容確認 ・ 音読及び暗唱活動 ・ 表現活動	Unit 6(Starting Out)	1	○ 教師の朗読を聞いて内容を想像する。 ○ 大意把握確認のためQ&Aをする。	○ 簡単な質問をいくつかしながら、物語への動機付けを行う。 ○ 平易な疑問文を用い、内容把握の確認をさせる。 ○ There is(are)～構文、動名詞について意味・用法・使用場面を説明し、理解させる。 ○ 「音読シート」を用い、音と綴りのつながりやイントネーションを意識させる。 ○ チャンク読み、Read & Look up、シャドーイングといった多様な音読活動をペアワークの学習形態で取り入れ、語順や基本表現の定着を図る。 ○ 範例となるパラグラフの適当な部分を空所にして、自己表現しやすくする。
	Unit 6(Dialog)	1	○ There is(are)～構文、動名詞について説明を聞く。 ○ 音読活動をし、発表する。	
	Unit 6(Reading for communication 1)	2	○ 音読活動をしペアワークをする。 ○ 語順テストを行う	
	Unit 6(Reading for communication 2)	1	○ There is(are)～構文、動名詞を用いて自己表現活動を行う。	
・ 言語材料の復習 ・ 本文全体の朗読	Unit 6 のまとめ	1	○ 単元テストを行う。 ○ 本文全体のグループ朗読を行う。	○ 生徒の間違いが多かった問題については、他の類似問題を解かせ、定着を図る。 ○ 本文の内容を思い浮かべながら、場面や登場人物の心情に応じて音読できるようにさせる。

Let's Read 2	指導目標	○ 物語の内容を正しく理解できるようにする。 ○ 積極的に音読活動に取り組み、本文の内容を場面や登場人物の心情に応じて音読できるようにする。 ○ 音読活動を通して身に付けた表現を用いて、自分の考えを伝えられるようにする。		
学習段階	学習内容	配時	学習活動	指導上の留意点
・ 本文のあらすじの理解 ・ 各パートごとの本文の内容理解 ・ 各パートごとの本文の内容確認 ・ 音読及び暗唱活動 ・ 表現活動	Let's Read 2 (P.68)	1	○ 教師の朗読を聞いて内容を想像する。 ○ 大意把握確認のためQ&Aをする。 ○ チャンク分け活動をする。	○ 簡単な質問をいくつかしながら、物語への動機付けを行う。 ○ 平易な疑問文を用い、内容把握の確認をする。 ○ チャンクについて説明をし、チャンク分け活動の目的を確認する。 ○ 「音読シート」を用い、音と綴りのつながりやイントネーションを意識させる。 ○ チャンク読み、Read & Look up、シャドーイングといった多様な音読活動をペアワークの学習形態で取り入れる。 ○ 本文及び重要表現の音読及び暗唱で、語順や基本表現の定着を図る。 ○ 範例となるパラグラフの適当な部分を空所にして、自己表現しやすくする。
	Let's Read 2 (P.69)	2	○ 音読活動をし、発表する。(教科書本文) ○ 語順テストを行う	
	Let's Read 2 (P.70)	1	○ 音読活動をしペアワークをする。(重要表現シート) ○ 重要表現シートの一部を変えて自己表現活動をする。	
	Let's Read 2 (P.71)	2	○ 重要表現を用いて自己表現活動を行う。	
・ 言語材料の復習 ・ 本文全体の朗読	Let's Read 2のまとめ	1	○ 単元テストを行う。 ○ 本文全体のグループ朗読を行う。	○ 生徒の間違いが多かった問題については、他の類似問題を解かせ、定着を図る。 ○ 本文の内容を思い浮かべながら、場面や登場人物の心情に応じて音読できるようにさせる。

中学校第2学年英語NEW HORIZON English Course 2の「Unit6」と「Let's Read 2」の単元で検証授業を行った(表3)。音読活動を十分に行い、音読への意欲を高めながら、表現力の基礎である正しい語順や基本表現を身に付けさせることを目標とした。「音読への興味・関心の高まり(視点Ⅰ)」「音読による正しい語順の定着(視点Ⅱ)」「音読による基本表現の定着(視点Ⅲ)」「音読を生かした自己表現活動による表現力の高まり(視点Ⅳ)」を検証の視点として、6回の検証授業を実施した。

Unit6では音読活動を中心に、新出文法事項を習得させ、それらを使って自己表現させることを目標とした。授業①では、語彙チャンクを意識しての音読に慣れさせたり、ペアでの音読を楽しませたりするよう授業を構成した。初めに、「チャンク」の働きや目的について説明をし、音読の際に意味のまとまりを意識させながら、スムーズに活動を行えるようにした。1学期期末テストの表現力に関する設問の結果と、10月に実施した音読テストの結果(表4)を踏まえ、習熟度別によるペアを組ませ、活動させた。

表4 音読テストの結果

	A(できてい る、ある)	B(ふつう)	C(できてい ない、ない)
読むことへの 意欲・態度	16	8	0
適切な音量	7	12	5
リズム イントネーション	5	12	7

音読活動においては、文字の大小で強弱やイントネーションを表し、チャンク分けされた音読シート(前頁図2)を使って、音読パターン(前頁表1)に沿って活動を行わせた。生徒はチャンク読みを行うことで声を全体的に大きくし、大切な語を強調した音読をすることでリズムが生まれ、読みやすくなるのではと考えた。【視点Ⅰ】

授業②の音読活動における暗唱タイムでは、暗唱シート(図3)を用いて、教科書本文の暗唱に取り

組ませた。その際4段階のLevelを設定し、Level B以上を目標とした。暗唱後、数名に発表させたところ、24名中Level D達成が2名、Level C達成が14名、Level B達成が7名、そしてLevel A達成が1名という結果であった。数名発表させた後、語順の定着を確認するために語順テストを行った。全体の75%の生徒がすべて正確に英文を書くことができている、残り25%についても誤答は一か所程度で、語順の定着という面では効果が感じられた。【視点Ⅱ】

授業③ではまず、前時に何度も暗唱していた“Is (are) there～?”を使って「あなたの家に～はありますか?」という質問をし合うペアワークを行わせた。そして、そのペアワークで自分が相手に尋ねた表現と相手の答えを、ミニノート(パターンプラクティス用ノート)に制限時間を与え、できるだけたくさん書かせた。【視点Ⅲ】

次に、教科書本文を前時と同じパターンでしっかり音読をさせ、授業の後半では、音読活動を通して身に付けた表現(動名詞)を使ったスピーチ文を作らせた。完成後、まずペアで発表し合い、次に全体の前で発表させた。4行程度の短い文だったため、ほとんどの生徒が原稿なしで発表できていた。中には、抑揚を付けることで、気持ちの込められたスピーチができていた生徒も数名いた。【視点Ⅳ】

「Let's Read 2」では、単元指導計画の始めの3時間を検証授業②とした(前頁表3)。実際に生徒自身に本文のチャンク分けをさせ、チャンクを意識して音読することに慣れさせたり、意味を考えて音読を楽

しむことができるように授業を構成した。また、本文に出てくる重要表現や慣用表現をまとめた「重要表現シート」(図4)を用いて生徒は音読・暗唱し、それらを使って自己表現することを目標とした。授業①～③で行ってきた音読活動を通して、「意味のかたまり」としてのチャンクを、大まかに生徒は把握している状態であった。そこで授業④では、チャンク分け活動に入る前に、チャンクの特徴をさらに確認させるために、授業③で使用した音読シートを振り返らせ、その特徴について考えさせた。そこで意見を出し合わせることで、チャンク分けについての発見を共有できるようにした。そしてその意見を「チャンク分けのポイント」(図5)としてまとめ、それを基に実際のチャンク分け活動に活用させた。チャンク分け活動の手順としては、まず個人でチャンク分けをさせた後、ペアで話し合いをさせながら、相手との共通点や相違点を発見させた。その後、ペアで話し合った内容や決定したチャンク分けについて発表させ、チャンク分けの考えを互いに参考にできるようにし、全体で最終確認をした。【視点Ⅰ】

引き続き、授業⑤でも目標文2文を与え、チャンク分け活動に取り組ませた。その後、音読パターン(p.76表1)に沿って音読活動をし、Level Bを目標に暗唱させた。授業⑥では、本文に出てくる重要表現や慣用表現を5文にまとめた重要表現シートを用いて音読させることによる表現力の高まりを検証した。「重要表現シートの音読→暗唱→一部を変えて自己表現→ペアワーク」という流れで活動し、重要表現の定着を図った。【視点Ⅲ】

次に、本文中の重要表現を使って、「私が小さかったころ」をテーマ

☆暗唱シート☆	
Level A	
Emi: What's () () about?	
Judy: It's about ()	
Emi: How ()! Is () anything interesting in it?	
Judy: Well, do () () the song <i>Silent Night</i> ?	
Emi: Of course.	
Judy: Well, there's () () about it here.	
Level B	
Emi: What's this _____?	
Judy: It's about _____.	
Emi: _____! Is _____ anything interesting _____?	
Judy: Well, do you know _____?	
Emi: _____.	
Judy: Well, there's a _____.	
Level C	
Emi: What's _____?	
Judy: It's _____.	
Emi: _____! Is _____?	
Judy: Well, _____?	
Emi: _____.	
Judy: Well, _____.	
Level D	
※何も見ずに暗唱してみよう!	

図3 暗唱シート

～Miyahara 先生編～	
① I want to be a good teacher.	私はいい先生になりたい。
② I could not make breakfast/because I got up late. =Because I got up late, I could not make breakfast.	私は遅く起きたので、朝食を作ることができなかった。
③ I was born in Karatsu.	私は唐津で生まれた。
④ I took care of my cat/ when I was a child. =When I was a child, I took care of my cat.	私は小さかったとき、/ネコの世話をした。
⑤ I am interested in movies.	私は映画に興味がある。
～自分編～	
① I want to _____/because _____	私は _____ したい。
② I could not _____/because _____ =Because _____/I could not _____	私は _____ ので _____ ができなかった。
③ I was born in _____	私は _____ で生まれた。
④ I took care of _____/when _____ =When _____/I took care of _____	私は _____ だったとき _____ の世話をした。
⑤ I am interested in _____	私は _____ に興味がある。

図4 重要表現シート

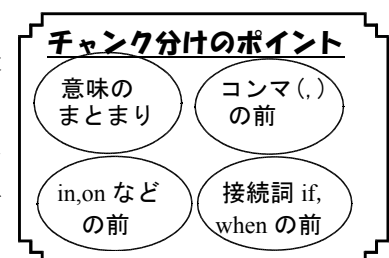


図5 チャンク分けのポイント

にスピーチ文を生徒は考えた。接続詞"when"と"because"を使って最初の一文はパターンを与え、続きの文は重要表現シート（前頁図4）の中のどれかを使って文を作ることを伝え、スピーチ文を完成させた。そして、完成したスピーチ文を発表させ、相互評価シート（図6）を用いて生徒による相互評価を行い、表現力の高まりを検証した。【視点IV】

図6 相互評価シート

(5) 検証の結果

ア 音読活動への関心の高まり

検証授業6回すべてにおいて、音読活動を行った。暗唱タイムまで含めて、それぞれの授業で約25～28分を音読活動の時間に当てた。授業の回数を重ねるごとに、音読パターンに生徒は慣れ、声も大きくなっていった。図7で見られるように、授業③においては75%，授業⑥においては88%の生徒が時間内にLevel C以上の暗唱が達成できた。

	音読した ユニット	人数（2年生24名）			
		Level A	Level B	Level C	Level D
授業① (H. 20. 11. 11)	Unit 6 (P. 58)	3	9	7	3
授業② (H. 20. 11. 13)	Unit 6 (P. 59)	2	14	7	1
授業③ (H. 20. 11. 20)	Unit 6 (P. 60)	1	5	11	7
授業④ (H. 21. 1. 15)	LR 2 (P. 68)	3	12	7	3
授業⑤ (H. 21. 1. 22)	LR 2 (P. 69)	3	10	9	2
授業⑥ (H. 21. 1. 27)	LR 2 (P. 69)	0	3	14	7

図7 暗唱の達成結果

自己評価表によると、「チャンクごとの意味を考えながら音読することができた」という項目に対して、89%の生徒が「できた」、「だいたいできた」と回答していた。このことから、チャンクが音読活動の手助けになっていることが分かる。また、生徒は教科書の本文をチャンクで区切って読んでいくことによって、内容を理解しながら読み進めることができるということも実感したようであった。

イ 音読による正しい語順の定着

音読した文の中から5問、5点満点の「語順テスト」を4回行った。図8はその平均得点の推移を表したものである。4回目のテストでは、83%の生徒が満点であった。テスト時の生徒の様子や満点ではなかった生徒の誤答傾向を分析すると、チャンクとしての語句のまとまりという点においては正しいつながりで書けていたため、語彙チャンクの定着に関しては成果があったことが分かる。一部チャンクの順序が違っているという誤答が見られたが、このことについては、更に繰り返し音読を行うことによって、改善されるのではないかとと思われる。

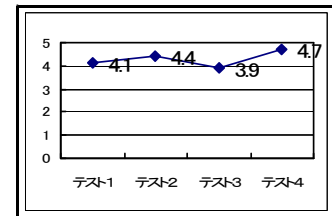


図8 語順テストの平均点の推移

ウ 音読による重要表現の定着

授業⑤では、教科書本文の音読活動後、その中で大切だと思われる5文を用いた「重要表現シート」（前頁図4）を使って、さらに音読を行った。生徒はモデル文の暗唱後、一部を変えて英文を作り、それを暗唱し、ペアで伝え合うことを目標とした。重要表現シートにおいては、5文中3文は全員の生徒が時間内に英文を作り、暗唱して相手に伝えることができた。残り2文（「whenとtake care of～」，「becauseとcould not～」を用いた文）については、3名の生徒が暗唱まで到達することができなかった。しかし、英文を作成する段階までは至っていたので、もう少し時間を与えれば達成できると思われる。このことから、「教科書本文+重要表現シート」のダブル音読で、語彙チャンクや基本表現の定着に効果が見られたことが分かる。

エ 音読を生かした自己表現活動による表現力の高まり

数か月間、音読を中心とした検証授業を行ってきた。10月の事前調査（意識調査、音読テスト）では、音読に苦手意識をもっている生徒が多かった。しかし、音読をじっくりと行うことで、明らかに英語の発話量が以前よりも増し、「声を出さず→読めるようになる→繰り返すことで暗唱で

きる→英語の語順に慣れる→語彙チャンクや表現が頭に残る→伝えたいと思うときに頭に浮かぶ→そのチャンクを使って表現する→話したいことが伝わる→自信がつく→英語で話せる」というよいサイクルが少しずつ生徒の中に出来上がっている。事後の意識調査では「チャンクで読むと読みやすくて、何回も授業中に読んでいたら暗唱するのはそんなに難しくなかった。」「音読して覚えた表現が、スピーチのとき使えてうれしかった。」という肯定的な感想が多くあり、87%の生徒が音読が表現力の向上に結び付くという認識を持っていることが分かった（図9）。

6 研究のまとめと今後の課題

本研究では、英語で自分の考えを表現する基礎的な力を育成するために、音読指導の工夫に焦点を当て研究を進めた。様々なパターンの音読に取り組みさせることで、発話量と共に、単語や語彙チャンク、基本表現などのインプットの量が増え、自己表現活動でそれをうまく活用できていたという点で効果が見られた。正しい語順や基本表現が定着していくということは、それを加工して自分で英文を考え、意志を伝えることができる可能性を示している。しかし、インプットの量としては個人差があり、それによって表現できる幅も違う。特に、語順テストで誤答が見られた生徒に関しては、学習段階に応じて英文を使う工夫とその手立てを考える必要がある。今後も目標をもたせながら、引き続きチャンクを活用した音読活動をさらに工夫し、豊かな感情表現も身に付けさせながら更に自己表現の幅を広げさせていきたい。

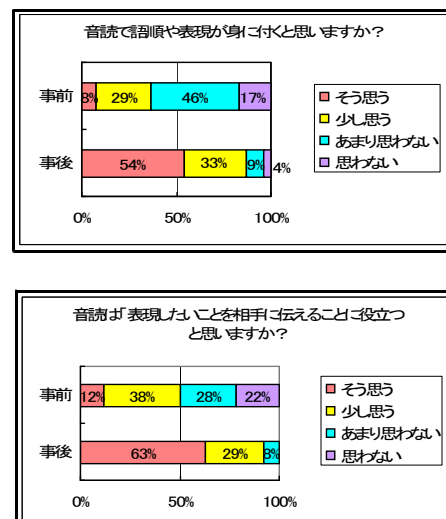


図9 意識調査の比較

（対象第2学年：24名）

《引用文献》

- 1) 文部科学省 『中学校学習指導要領解説 外国語編』 平成20年9月 p. 7
- 2) 中嶋 洋一 『英語好きにする授業マネジメント30の技』 2000年 明治図書 p. 79
- 3) 土屋 澄男 『英語コミュニケーションの基礎を作る音読指導』 2004年 研究社 p. 11

《参考文献》

- ・ 門田 修平 『シャドーイングと音読の科学』 2007年 コスモピア
- ・ 斎藤 栄二 『英語授業レベルアップの基礎』 2001年 大修館書店
- ・ 田中 武夫・田中 知聡 『自己表現活動を取り入れた英語授業』 2003年 大修館書店
- ・ 國弘 正雄編 『英会話・ぜったい・音読』 2001年 講談社
- ・ 門田 修平・野呂 忠司編著 『英語リーディングの認知メカニズム』 2001年 くろしお出版

《参考URL》

- ・ 佐賀県教育センター 『平成19年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書』 2008年3月
https://www.saga-ts.jp/Chosa/report/chu_ei/index.htm
 (2009年3月)